『映像きもの学2009』 －全28巻－

安部　亨　郡山　光　樋口　葵
水本　亜希　大鷹　浩晃　高橋　寛光
（深井　勉ゼミ）

1.「きもの学」講座の趣旨

きものは、日本の歴史と風土を背景に、文化・芸能・行事と密接な関わりを持ちながら発展を遂げてきました。即ち、日本の豊かな自然と人の共生を重んじる生活文化の下で、鋭い感性と美意識に支えられ、世界に類を見ない優雅にして精緻な世界を創出してきました。作家や職人の断えまない研鑽によって生み出された多彩な意匠や染織技術は、正しく日本文化そのものと言えます。

この講座は、きものときもの文化にまつわる染織の世界を通して、日本文化に関心を持っていただくことを目的に、日本を代表する染織作家、研究者、伝統芸能、着付、流通等でご活躍の方々を講師にお迎えし、多面的に学んで頂くことを目的に開講します。

（『2009きもの学』 実施要綱）

2.「きものの歴史」

着物という名称は〈着るもの〉という意味を含めて生まれたものと思われる。

着物は日本の衣服のなかで、洋服に対して和服を指すものであり、明治以来、大正・昭和と着物という名称が生活の中に定着してきた。欧米人にもキモノと呼ばれ、日本趣味に興味持った親日家の間でもてはやされる存在であった。

これが十九世紀末のジャポニズムの波に乗り、日本のキモノは華麗に外国へデビューし、帯を胸高に巻いた西欧婦人の肖像画や浮世美人の立姿を模した油絵などが見られた。

戦後には、アメリカ映画の映像にキモノの一枚着を室内着としてであろうか、ひらひらと着流しているシーンが映されていた。帯の代わりにベルトか飾り紐を用いている様子は新鮮な驚きであった。

二十世紀も後半になると、女性の社会進出は盛んになり、女性の着物離れの傾向が進んだ。衣服は社会や生活様式が変わると、それにともなって適合した衣服に変化していくものである。

しかし、着物は日本人にとって一種の郷愁であり、離れがたいものがある。そのように考えるのは、明治、大正、昭和の半ばまで、つまり二十世紀の前半までに生まれた女性たちであり、たとえ箪笥のこやしになろうとも、大切に帖紙に包んだまま放したくないと考えている。リサイクルショップに預けてしまうなどとても考えられない。あわただしく日を過ごす働く女性も、休日にはふと自分を変えてみようとする。こころみに、和服をおしゃれ着として着てみる。現代社会に登場する着物は、特別な意味で、はやり言葉で言うならは、「癒し」の衣服として存在することがある。

（『図説　着物の歴史』 より抜粋）

３.「きものの特長」

和服は直線裁ちであるので、洗い張り、仕立て直しを繰り返して行うことができます。汚れたり色があせたもの、また年齢にあわなくなったものなどは、染め直しをして、再生させることが出来、先染（さきぞめ）織物などで、染め直しができないものは半纏（はんてん)、ふとんなどへと利用することもできます。こうして着物の寿命を保たせ、親から子へ、子から孫へと着用の可能性のある限り受け継いでいくことも、その心遣いひとつでできるという特長を持っています。なお、和服は、体型をカバーし美化する特長を持っています。また巻衣式筒型であるから、とくに下半身の保温に適しており、冷えを防いだり、帯を簡略化すれば着脱が便利になり病人にも適応し看護もしやすい衣服です。

(『日本大百科全書』 小学館)

『映像きもの学2009』 －全28巻－

「２００９きもの学」講義内容　　９月１日（火）～９月 19 日（土）

火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
9/1	9/2	9/3	9/4	9/5
きもの概論① 「日本人の衣生活ときもの」 日本のきものぶらす 編集部編集・発行人 日本きもの学会　常任理事 清田のり子	きもの概論③ 「男のきもの」 オフィス早坂　代表 日本きもの学会　常任理事 早坂伊織	きもののできるまで② 「繊維と小巾絹織物 （丹後ちりめん）」 ポリテクカレッジ京都 元非常勤講師・芋田機業場 代表者　芋田薫	きもののできるまで④ 「染のきもの」 きもの染色技術研究家 生谷吉男	きもののできるまで⑥ 「きものの文様・紋」 （財）西陣織物館　顧問 藤井健三
きもの概論② 「女のきもの」 （財）日本きもの文化協会　会長 清水とき	きもののできるまで① 「きものの構造から 見える知識」 装賀きもの学院　院長 安田多賀子	きもののできるまで③ 「日本の色 衣裳の彩」 染司よしおか　当主 吉岡幸雄	きもののできるまで⑤ 「先染織物と西陣織」 京都市産業技術研究所 繊維技術センター センター長　八田誠治	きもの概論④ 「通過儀礼と装い」 服部和子きもの学院　院長 平安女学院大学客員教授 服部和子
9/8	9/9	9/10	9/11	9/12
歴史① 「きものの歴史」 関西学院大学　文学部教授 河上繁樹	儀式作法 「暮らし儀式作法 ―その心としきたり―」 儀式作法研究会　代表 岩上力	テスト	「沖縄染織の歴史・ 文化・琉球列島染織 紀行」 京都伝統染織学芸舎　主宰 日本きもの学会　常任理事 富山弘基	「日本女性時代装束 ―染織祭衣装―」 京都伝統産業ふれあい館 学芸員 北川満哉
歴史② 「江戸文化　友禅染 による小袖文様」 華頂短期大学　教授 馬場まみ	きものの魅力 消費者に伝えたい 「きもの」の魅力 （株）銀座もとじ代表取締役 社長　泉二弘明	実地研修		
9/15	9/16	9/17	9/18	9/19
「正倉院文様」 共立女子大学　教授 長崎巌	「戦国武将の衣装美」 武蔵大学　教授 丸山伸彦	「和歌の世界」 （財）冷泉家時雨亭文庫 常務理事 冷泉貴実子	「花街の技 ―宮川町男衆」 舞妓着付け屋「花風」代表 堀切修嗣	「長じゅばんの歴史と おもしろ長じゅばん」 京のじゅばんや& 町家の美術館・紫織庵館主 川崎栄一郎
	「私の光源氏」 服飾評論家 日本和装師会　会長 市田ひろみ	「日本舞踊・歌舞伎・ＮＨＫ 大河ドラマにおける衣裳」 岩井流家元・女優 岩井友見	「花街の技―結髪―」 京都美容文化クラブ副会長 山中美容室　代表 山中惠美子	「２００９きもの学まとめ」 京都学園大学学長 日本きもの学会　会長 波多野進　他

きもの概念①　「日本人の衣生活ときもの」

日本きもの学会　　常任理事
「日本のきものぷらす」編集部　編集・発行人　清田のり子

私たちは、日常を洋服で過ごしていますが、日本には本来、「きもの」と言う衣服があります。日本の風土と歴史の中で育まれてきた「きもの」は、世界の中でどのような特色を持っているのでしょうか？考えてみましょう。

きもの概念②　「女のきもの」

(財) 日本きもの文化協会　会長　清水　とき

日本のきものは、世界的に特異な形態と装飾が見られる衣服だといえます。
「女のきもの」を見ながら、基礎知識やＴＰＯについて学びます。また、きものの着方・帯の結び方について解説します。

きもの概念③　「男のきもの」

オフィス早坂　代表
日本きもの学会　常任理事　早坂　伊織

「男のきもの」の注目度が益々高まっています。和文化に親しむにも、日本人としての心に触れるにも、「きもの」は、日本文化共通の財産です。「きものの基本」に対する考え方、文化、教養実技などの多彩な内容で「男のきもの」を学びます。

きもののできるまで①　「きものの構造から見える知識」

装賀きもの学院　院長　安田多賀子

８枚の布から構成される直線仕立てのきもの。その構造があっての名称、収納、必要な小物が見えてきます。勿論立ち居振る舞いも同様です。きものの構造から見える知識について学びます。

きもののできるまで②　「繊維と小巾絹織物（丹後ちりめん）」

ポリテクカレッジ京都　元講師
芋田機業場　代表者　芋田　　薫

綿・毛・麻そして、繊維の女王と称される絹糸の素晴らしさと、きものの原点である絹の歴史を学習します。後半は、小巾絹織物（丹後ちりめん）の製法や歴史と未来について学びます。

きもののできるまで③　「日本の色　衣装の彩」

染め司よしおか　店主　吉岡　幸雄

日本の古代より染織と色彩の発展を探りながら、日本人は自らの衣裳にどのような彩を表してきたのか、平安時代の源氏物語を中心に日本人が愛した色について学びます。

きもののできるまで④　「染のきもの」

きもの染色技術研究家　生谷　吉男

染のきものが出来上がるまでの過程と、日本各地で生産される染のきもののやさしい理論とその特長をその土地における文化との関連を述べ、染色堅ろう度についても学びます。

きもののできるまで⑤ 「先染織物と西陣織」

京都市産業技術研究所繊維技術センター
センター長　八田　誠治

先染織物と後染織物について学びます。また、帯の主たる産地でもある「西陣織」についての組織・生産工程についても学びます。

きもののできるまで⑥ 「きものの文様・紋」

(財) 西陣織物館　顧問　藤井　健三

伝統ある日本の「きもの」に用いられる多様な文様について、その歴史と意味合いを紐解きます。また、「きもの」に欠かせない紋章に関しても発祥と分類、歴史について学びます。

きもの概論④ 「通過儀礼と装い」

服部和子きもの学院　院長　服部　和子

人の人生には、宮参りから七五三・十三参り、成人式・結婚式・葬式等の節目があり、節目ごとに「通過儀礼」が行われ、各々の儀式では、「きもの」を装います。「通過儀礼」の起こりや意味、装いについて学びます。

歴史① 「きものの歴史」

関西学院大学　文学部教授　河上　繁樹

きものは、もともと平安時代の貴族の下着でしたが、中世には武家の女性が表着として用いるようになりました。講義では、平安時代の衣裳ときものの成立について学びます。

歴史② 「江戸の文化　友禅染による小袖文様」

華頂短期大学　教授　馬場　まみ

江戸時代、小袖装飾の技法として友禅染が開発される。絵を描くように文様を表現することができる友禅染は、画期的な技法でした。友禅染出現の背景と技法上の特色を解説し、江戸時代に製作された友禅染小袖を概観します。

儀式作法 「暮らし儀式作法―その心としきたり―」

儀式作法研究会　代表　岩上　　力

京都には、様々な儀式作法があります。そして、そこには、日本の優しい心が秘められています。良き儀式文化のしきたりについて学びます。

きものの魅力 「消費者に伝えたい“きもの”の魅力」

株式会社銀座もとじ 代表取締役社長　泉二　弘明

「銀座もとじ」が何よりも大切にしてきたのは、「お客様の心」と「作り手の心」。業界初の「男のきもの」専門店を開くなど、常に新しい取り組みを行ってきました。和文化が見直されている中、きものの魅力・モードについて語ります。

「沖縄染織の歴史・文化・琉球列島染織紀行」

京都伝統染織学芸舎　主宰
日本きもの学会　常任理事　富山　弘基

沖縄県では、旧琉球王国時代に染織工芸が際立った発達を遂げました。亜熱帯気候を背景に南島の異風

な染織は、芸術と特異な技法で、紅型、琉球絣、紬、上布、芭蕉布、藍染などに優れた染織文化を育みました。日本本土の染織界にも大きな影響を与え、染織の宝庫と称えられる琉球染織について学びます。

「日本女性時代装束―染織祭衣装―」

京都伝統産業ふれあい館　学芸員　北川　満哉

昭和６年～８年に染織業の発展を祈念し、染織祭が京都で執り行われた。衣裳は、上古（古墳）時代より江戸時代後期に至り、当時の斯界第一人者の厳格な時代考証のもとに、その地合、文様、染色、織組織は下着に至るまで、それぞれの時代を忠実に現出されました。当時の技巧の最善を尽くされた「日本女性時代装束」について解説します。

「正倉院文様」

共立女子大学　教授　長崎　　巌

天平の時代、シルクロードを渡り、中国を経由して日本に入ってきた器物や染織品は、それまで日本人が見たことない美しい工芸品でした。色鮮やかで美しい染織品、日本の染織デザインの幕開けを告げるものでした。千年の時空を越えて人々に愛される正倉院文様について学びます。

「戦国武将の衣裳美」

武蔵大学　教授　丸山　伸彦

室町時代中期、応仁の乱を契機に、勝者となった将軍達の装いは、自由闊達で、威厳を誇示するための意匠表現へと向かい、やがて小袖など近世染織に大きな影響を与えました。戦国武将の衣裳美について学びます。

「私の光源氏」

服飾評論家
日本和装師会　会長　市田ひろみ

源氏物語の中のしきたりやくらしむきは、そのまま、現在の暮らしの中に生きています。冠婚葬祭のルーツを探ります。

「和歌の世界」

(財) 冷泉家時雨亭文庫常務理事　冷泉貴実子

日本文化の中の中枢であった和歌は、どういうものかを考えます。また、それが「きもの」に与えた影響を探ります。

「日本舞踊・歌舞伎・ＮＨＫ大河ドラマにおける衣裳」

岩井流家元・女優　岩井　友見

歌舞伎俳優十代目岩井半四郎の長女として生まれ、和の文化の中に育ち、女優として40年、家元として27年の体験から見た、歌舞伎衣裳・舞踊衣裳、又、ＮＨＫ大河ドラマにおける様式美に変化した「きもの」、舞踊会、大河ドラマの制作過程、撮影（ハイビジョン）の苦労等について語ります。

「花街の技―宮川町男衆―」

舞妓着付け屋「花風」 代表　堀切　修嗣

京都五花街の一つ宮川町で現役の男衆として、かんざし・化粧・衣裳・履物・着付けのすべてを本物にこだわり活躍中。舞妓の衣裳の着付けを行いながら、花街の技について学びます。

「花街の技―結髪―」

京都美容文化クラブ　副会長
京都美容組合日本髪保存　講師
京都美容専門学校古典　講師
山中美容室　代表　山中惠美子

古墳時代からの江戸時代・明治時代・現在に至る日本髪文化の変遷について学びます。また、日本髪の結い方について"舞妓の結髪"の実演を行いながら解説します。

「長じゅばんの歴史とおもしろ長じゅばん」

京のじゅばん＆町家の美術館
紫織庵　館主　　川崎栄一郎

“おもしろ”と呼ばれる昔の長じゅばんを展示し、その柄の由来やデザインについて解説。長じゅばんの歴史とデザインから時代背景を考察します。

「２００９きもの学まとめ」

京都学園大学　学長　波多野　進

本年のきもの学講座の総括及び、きもの市場の概況に関する「キーノートスピーチ」の後、ゲストを交えた受講者とのディスカッションを通して、「きものの今とこれから」を改めて考えます。

「きもの学」の中継・録画スタッフ

大学で機材の操作を確認している

講義の様子とカメラマン・ＶＴＲ録画・ミキサー

＜中継・録画スタッフメンバー＞

2006M003	安部　亨	2006M055	水本　亜希
2006M022	郡山　光	2006M070	大鷹　浩晃
2006M042	樋口　葵	2006M092	高橋　寛光

＜「きもの学」の撮影にあたって＞

　きもの学を撮影するにあたって、事前に大学での機材の操作、カメラワークのリハーサルを行った。しかし、最初はまだぎこちなさがあったが、みんなで真剣に取り組んだので講義期間中、特に問題なく撮影、収録を進めることができた。

＜制作スケジュール＞

リハーサル　　2009年８月31日（月）
　　朋文館　１階ロビー

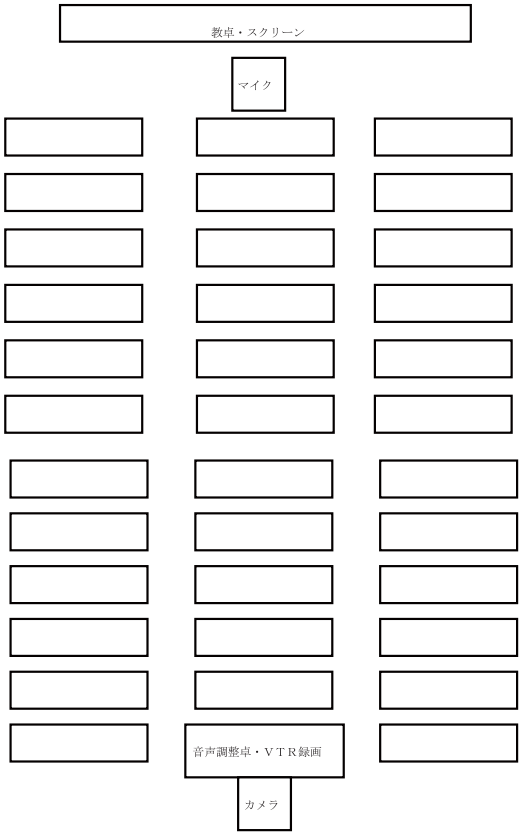
中継撮影　　2009年９月１日（火)～９月10日（木）　基礎講座
　　キャンパスプラザ京都４階　第２講義室

　　2009年９月11日（金)～９月19日（土）　発展講座
　　キャンパスプラザ京都４階　第２講義室

編集作業～完成　　2009年10月～2009年12月
　　朋文館１階編集室にてテロップ作成、DVDダビング作業
　　資料収集、キャプション原稿作成、作品完成

＜カメラ及びマイクロフォンの配置とその役割＞

カメラ　…会場全体、講師、
　　スクリーンの撮影
ミキサー…音量調節、講師マイク



作品概要

1．きもの概念①

「日本のきもの」　編集・発行人
日本きもの学会　常任理事　清田のり子

「日本人の衣生活ときもの」

「きもの」をお召しになったことはありますか？日本のきものは世界でも特色ある衣服です。日常生活ではすっかり洋服が定着しましたが、これを前提に「きものの歴史」「現代のきもの」「きものと洋服の違い」等について学びました。

2．きもの概念②

(財) 日本きもの文化協会　会長　清水　とき

「女のきもの」

日本のきものは、世界的に特異な形態と装飾が見られる衣服だといえます。
「きものと帯＋小物との調和美」「季節との調和とおしゃれな楽しみ方」「おしゃれ着とフォーマル着～遊びとおしゃれ・趣味と礼」について学びました。

3．きもの概念③

着物伝承家
日本きもの学会　常任理事　早坂　伊織

「男のきもの」

「男のきもの」の注目度が益々高まっています。和文化に親しむにも、日本人としての心に触れるにも、「きもの」は、日本文化共通の財産です。「きものの基本」に対する考え方、文化、教養実技などの多彩な内容で「男のきもの」を学びました。

４．きもののできるまで①

装賀きもの学院　院長　安田多賀子

「きものの構造から見える知識」

８枚の布から構成される直線仕立てのきもの。その構造があっての名称、収納、必要な小物が見えてきます。①きものとは～平面と直線、縫い代の役割、着る人がデザイナー　②着る為に必要な小物の存在　③きものの美の完成は立居振舞にあり
以上、きものの構造から見える知識について学びました。

５．きもののできるまで②

ポリテクカレッジ京都　元非常勤講師
芋田機業場　代表者　　芋田　　薫

「繊維と小巾絹織物（丹後ちりめん）」

綿・毛・麻そして、繊維の女王と称される絹糸の素晴らしさと、きものの原点である絹の歴史を学習しました。後半は、小巾絹織物（丹後ちりめん）の製法や歴史と未来について、①蚕・生糸の話②生糸から白生地（丹後ちりめん）③白生地の種類と製造工程　の順に学びました。

６．きもののできるまで③

染司よしおか　当主　吉岡　幸雄

「日本の色　衣装の彩」

日本の古代より染織と色彩の発展を探りながら、日本人は自らの衣裳にどのような彩を表してきたのか、平安時代の源氏物語を中心に日本人が愛した色について学びました。

7．きもののできるまで④

きもの染色技術研究家　生谷　吉男

「染めのきもの」

染のきものが出来上がるまでの過程（染色の仕組みや様々な染色の技法・特徴、仕上げ加工）と、日本各地で生産される染のきもののやさしい理論とその特長をその土地における文化との関連でとらえ、染色堅ろう度についても学びました。

8．きもののできるまで⑤

京都市産業技術研究所繊維技術センター
センター長　八田　誠治

「先染め織物と西陣織」

先染織物と後染織物について学びました。また、帯の主たる産地でもある「西陣織」について、ルーツから生産の組織・生産工程についても学びました。

9．きもののできるまで⑥

(財) 西陣織物館　顧問　藤井　健三

「きものの文様・紋」

伝統ある日本の「きもの」に用いられる多様な文様について、その歴史と意味合いを紐解きました。また、「きもの」に欠かせない紋章に関しても発祥と分類、歴史について学びました。

10．きもの概論④

服部和子きもの学院　院長
平安女学院大学　客員教授　服部　和子

「通過儀礼と装い」

人の人生には、宮参りから七五三・十三参り、成人式・結婚式・葬式等の節目があり、節目ごとに「通過儀礼」が行われ、各々の儀式は、「きもの」を装います。「通過儀礼」の起こりや意味、装いについて学びました。

11．歴史①

関西学院大学　文学部教授　河上　繁樹

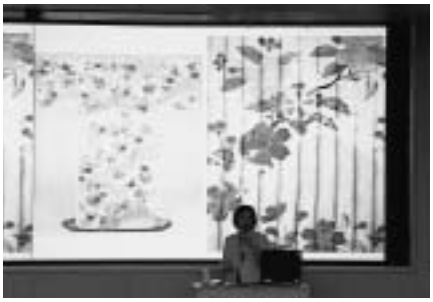
「きものの歴史」

きものは、もともと平安時代の貴族の下着でしたが、中世には武家の女性が表着として用いるようになりました。講義では、平安時代の衣裳ときものの成立について①公家女性の服装②小袖の成立と表着化③小袖の多様化の順に学びました。

12．歴史②

華頂短期大学　教授　馬場　まみ

「江戸の文化　友禅染による小袖文様」



江戸時代、小袖装飾の技法として友禅染が開発される。絵を描くように文様を表現することができる友禅染は、画期的な技法でありました。

友禅染出現の背景と技法上の特色と江戸時代に製作された友禅染小袖について学びました。

13．儀式作法

儀式作法研究会　代表　岩上　　力

「暮らしの儀式作法―その心としきたり」

どうして儀式作法は生まれたのかという儀式作法の心と意義を儀式作法の誕生、水引・熨斗・紙折の約束事に触れながら解説。また、十の儀礼と冠婚葬祭贈礼法、人生の通過儀礼と仏事作法について学びました。

14．きものの魅力

株式会社銀座もとじ　代表取締役社長　泉二　弘明

消費者に伝えたい「きもの」の魅力

「銀座もとじ」が何よりも大切にしてきたのは、「お客様の心」と「作り手の心」。業界初の「男のきもの」専門店を開くなど、常に新しい取り組みを行ってきた泉二社長に、きものにかける熱意ときものの魅力・モードについて解説をうけました。

15．「沖縄染織の歴史・文化・琉球列島染織紀行」

京都伝統染織学芸舎　主宰
日本きもの学会　常任理事　富山弘基

沖縄県では、旧琉球王国時代に染織工芸が際立った発達を遂げました。亜熱帯気候を背景に南島の異風な染織は、芸術と特異な技法で、紅型、琉球絣、紬、上布、芭蕉布、藍染などに優れた染織文化を育みました。日本本土の染織界にも大きな影響を与え、染織の宝庫と称えられる琉球染織について学びました。

16.「日本女性時代装束－染織祭衣装　－きもの装飾美を追って－」

京都伝統産業ふれあい館　学芸員　北川　満哉

昭和６年～８年に染織業の発展を祈念し、染織祭が京都で執り行われた。衣裳は、上古（古墳）時代より江戸時代後期に至り、当時の斯界第一人者の厳格な時代考証のもとに、その地合、文様、染色、織組織は下着に至るまで、それぞれの時代を忠実に現出されました。当時の技巧の最善を尽くされた「日本女性時代装束」について学びました。

17.「正倉院文様」

共立女子大学　教授　長崎　　厳

天平の時代、シルクロードを渡り、中国を経由して日本に入ってきた器物や染織品は、それまで日本人が見たことない美しい工芸品でした。色鮮やかで美しい染織品、日本の染織デザインの幕開けを告げるものでした。千年の時空を越えて人々に愛される正倉院文様について学びました。

18.「戦国武将の衣装美」

武蔵大学　教授　丸山　伸彦

室町時代中期、応仁の乱を契機に、勝者となった将軍達の装いは、自由闊達で、威厳を誇示するための意匠表現へと向かい、やがて小袖など近世染織に大きな影響を与えました。戦国武将の衣裳美について、服飾変遷の三大原則の一つである"形式昇格"の原則に着目して、「なぜキモノには模様があるのか」という問題を視野に入れて、直垂、素襖、肩衣袴という服飾形式の特徴と変遷の過程を考察しました。

19.「私の光源氏」

服飾評論家
日本和装師会　会長　市田ひろみ

源氏物語の中のしきたりやくらしむきは、そのまま、現在の暮らしの中に生きています。冠婚葬祭のルーツを探りました。

20.「和歌の世界」

財団法人冷泉家時雨亭文庫　常任理事　冷泉貴実子

日本文化の中の中枢であった和歌は、どういうものかを考えました。また、それが「きもの」に与えた影響を節句をテーマに詠まれた和歌を例示しながら探りました。

21.「日本舞踊・歌舞伎・ＮＨＫ大河ドラマにおける衣装」

岩井流家元・女優　岩井　友見

歌舞伎俳優十代目岩井半四郎の長女として生まれ、和の文化の中に育ち、女優として40年、家元として27年の体験から見た、歌舞伎衣裳・舞踊衣裳、又、ＮＨＫ大河ドラマにおける様式美に変化した「きもの」、舞踊会、大河ドラマの制作過程、撮影（ハイビジョン）の苦労等について解説してもらいました。

22.「花街の技―宮川町男衆―」

舞妓着付け屋「花風」代表　堀切　修嗣

京都五花街の一つ宮川町で現役の男衆として、かんざし・化粧・衣裳・履物・着付けのすべてを本物にこだわり、活躍中の堀切さんが舞妓の衣裳の着付けを行いながら、花街の技について解説しました。

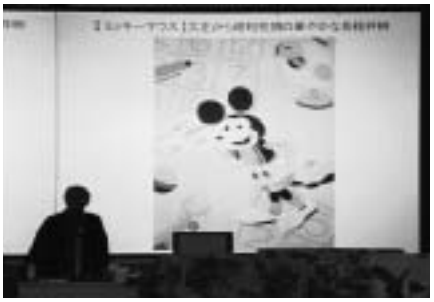
23.「花街の技―結髪―」

京都美容文化クラブ　副会長
京都美容組合日本髪保存　講師
京都美容専門学校古典　講師
山中美容室　代表　　山中惠美子

日本髪の古墳時代からの江戸時代・明治時代・現在に至る日本髪文化の変遷について学びました。また、日本髪の結い方について“舞妓の結髪”の実演を行いながら解説をうけました。

24.「長じゅばんの歴史とおもしろ長じゅばん」

京のじゅばん＆町家の美術館
紫織庵館主　　川崎栄一郎



“おもしろ”と呼ばれる昔の長じゅばんを見ながらその柄の由来やデザインについて学びました。また、長じゅばんの歴史とデザインから時代背景を考察しました。

25．きもの学まとめ

日本きもの学会　会長
京都学園大学　学長　波多野　進

本年のきもの学講座の総括及び、きもの市場の概況に関する「キーノートスピーチ」の後、ゲストを交えた受講者とのディスカッションを通して、「きものの今とこれから」を改めて考えました。

終わりに

今回この「きもの学」講義の撮影に参加し、講義中のカメラ中継・録画・音声、どれも普段は関わることのできない貴重な体験ができた。「きもの学」を撮影するにあたって事前に機材の操作、カメラワークのリハーサルをした。本番では準備の段階からそれぞれが役割分担を決め各箇所の準備をした。カメラ担当はカメラを素早くセッティングし、ミキサー担当はマイクを設置し音量調整をした。リハーサルと各個人の頑張りもあり、「きもの学」の撮影期間中は問題なく撮影・録画を進めることができた。

「きもの学」の講義撮影が終わり10月から本格的に作業に取り組んだ。ＤＶＤにダビングし、テロップ制作、文書作成をメンバー全員が分担して行った。この６人で１つの作品を作り上げるのは初めてで、チームワークの重要性と作り上げた時の喜びを実感した。

最後に、この「きもの学」の講義に参加して、今では普段、生活しているとあまり関わることのない「きもの」、その「きもの」の知らなかった歴史や「きもの」の魅力を再認識するいい機会になったと思う。

謝　　辞

この映像「きもの学」の制作にあたり、本学経済学部・大西辰彦教授をはじめ、社団法人・全日本きもの振興会と「きもの学」講師の先生方、大学コンソーシアム京都の関係各位にご指導、ご協力いただいたことに感謝と御礼を申し上げます。

引用・参考文献

『2009きもの学』 実施要綱
『2009きもの学』 レジュメ
『図説　着物の歴史』　河出書房出版社
『日本大百科全書』　小学館